
愛の証明

詩架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の証明

【Nコード】

N7892Y

【作者名】

詩架

【あらすじ】

ある日彼のベッドで目を覚ますと、私の左足首に足枷が取り付けられていた。疑問に思った私は部屋に現われた彼に理由を訊いた。「君に消えて欲しくないから。どこにも行って欲しくないからだよ。私はなんとか説得しようとするが、彼は納得してくれない。」

そして始まった監禁生活。

そんな彼と私の結末は……？

R15レベルの表現があります。

ただしこれはあくまでそういう表現が苦手な人のための表記です。で、そのところをご理解下さい。内容はシリアスです。色々詰めの良いところがありますがよろしくお願いします。

他サイトにも投稿させてもらっています。

ある日彼のベッドで目を覚ますと、私の左足首に見慣れない、金属製の輪っかが取り付けられていた。銀色のひんやりとした輪っか。その輪っかからは鎖が伸びており、たぶんベッドの足首と繋がられているのだろう。足を動かすと、じゅらりと音が鳴った。

拘束されている。

でもどうして？

私は首を傾げる。理由を知りたくて周囲を見渡してみるものの、彼はもう起きたのかこの部屋にはいなかった。

静か。

右を向けば私が寝ていたベッドからメートル弱離れたところに、明るい色調のカーテンで覆われた窓が見える。カーテンからは少しだけ太陽の光が透過されていて、朝になったのだとわかった。

私は掛け布団を身にまといながらベッドから降り、窓へと近づいた。音を立てる鎖に改めて拘束されているんだなと実感させられたけれど、長さに余裕があるのか簡単に窓まで辿り着けた。

カーテンの境目に手を入れる。窓は閉まっっていて、鍵が掛けられていた。

閑散としているような気がしたのはこのためかと、私は一人納得する。まだ暑さが残るこの時期、普段は窓を開け放っているから、大通りに面した彼の部屋には自動車の走る音とかがよく聞こえるのだ。

でも今日は窓が閉まっている代わりにクーラーが作動していた。

「おはよう。起きていたんだね」

ドアが開く音とその声に私は振り返った。

「おはよう」

平常の穏やかな眼差しをした彼に私も挨拶した。

「ねえ、これは何？」

私は自分の左足首に取り付けられた輪っかを指差し、彼に尋ねた。
「足枷だよ」

彼は当たり前のことのように言った。

「どうして私に足枷を付けたの？」

「君に消えて欲しくないから。どこにも行つて欲しくないからだよ」
「いなくなつたりなんてしないよ。こんなことしなくても私はあな
たの傍にいるのに。会社とかがあるから四六時中はさすがに無理だ
けど」

私は困り顔で微笑む。

「嘘だ！そんな言葉、信じられない。君もいなくなるんだろう！？」

彼は声を荒らげた。瞳が不安定に揺れ始める。

「本当だよ。私はあなたの傍にいるよ」

私はベッドの上を横切つて降り立ち、彼の左頬に右手を添えた。

「ね、私はここにいますよ」

彼の体温を私が感じているように、彼にも私の温かさが伝わって
いるはずだ。

「……ごめん。でも君を解放するわけにはいかないんだ」

悲しげに顔を歪ませ、私の右手を掴む彼。

「……」

ギョツと痛いくらい私の手を握り締める彼の様子を見て思う。

本当に私が消えてしまふかもしれないと恐れているんだなって。

「ねえ、とりあえず服を着る間だけ外してくれない？このままだと
恥ずかしいから。あなたが望むのなら、また私に足枷を付けてもい
いから」

私は鎖を持ち上げ言った。

「いいよ。服を着る間だけなら」

彼はズボンのポケットから細長い鍵を取り出すと、私の足枷を外
してくれた。

「ありがとう」

私は礼を告げ、服を身に付け始める。

彼は私から離れていてくれた。でもドアを塞ぐ形で立ち、私を射抜く視線は彼が本気だということを示していた。

どうしてこんなことになってしまったんだろう？

私は頭の中で思い当たる節を探してみる。彼は元々不安定な人だったけれど、何か原因があるかもしれない。

私は半袖のブラウスの袖に腕を通す。

「あつ」

心当たりを見つけて、私は小さく声を上げた。

ちょうど一週間前。私は自動車に轢かれそうになったのだ。

彼と週末、晩御飯を食べに行った帰り。周囲への注意力が散漫になっていた私は車が走って来るのに気づかず、横断歩道に飛び出してしまったのだ。間一髪のところまで彼が私の腕を引き戻してくれたおかげで事なきを得たのだった。

その後彼は私を抱き締めて離さなかった。「大丈夫だよ」って彼の背中をトントンと叩いて、ちゃんと無事だよって示しなだめることで、やっと解放してもらえたのだった。

私はスカートに足を通した。

彼は交通事故で両親を亡くしている。彼の両親の場合は自動車同士の事故だったらしいけれど、それとダブって見えたのかもしれない。

だから私がいなくなってしまうと思い込んでこんなことをしてしまっただのかな？

「着終わったよ」

私は彼にそう告げた。彼は再び私の左足首に枷を取り付けた。

またベッドの足首と繋がられちゃったなんて漠然と思っていると彼はベッドの方の足枷を取り外した。

私が驚いた表情を浮かべると

「朝食ができているから一緒に食べよう」

彼は外した足枷付きの鎖を持ちながら歩き始めた。当然私に取り付けられた足枷も引っぱられるから、転ばないように慌てて歩き始

めた。

彼の家は1DKのアパートの一室。部屋を出るとまずアイボリー色の絨毯、その上に置かれているテーブルと椅子が目飛び込んでくる。

彼はテーブルの足に足枷を繫いだ。

テーブルにはすでに朝食が用意されていた。トーストに野菜サラダ、オムレツにコーンスープ。

朝なのにメニューが豊富だ。

彼はいつも、少なくとも私がいる時はたくさんの料理を作ってくれるのだ。私は普段一人の時は、トーストだけだったり食べることすら面倒で、朝食そのものを抜いてしまう。だからそんなに食べなくても平気なのだけれど、以前彼にそう話したら「きちんと食べないと駄目だよ」と怒られてしまったから、彼といるときだけはちゃんと取るようにしているのだ。

「いただきます」

私は手を合わせた後スプーンを持ち、コーンスープを掬う。所々に浮かぶ、つぶつぶ。インスタントじゃなくてきちんととうもろこしを使って一から作られている。

手の込んだ料理。オムレツはチーズ入り、サラダはレタス、キャベツ、きゅうり、トマト、人参、と野菜の種類が多いし、トーストは程良い焼き加減だ。彼によると、前もって準備しておくから大変ではないそうだが、私にはとても真似できない。

彼と付き合い始めたばかりの頃は私も料理を作ってあげたりしたのだが、あまりの出来映えの差に今ではすっかり彼に任せっきりだ。「トーストには何を付ける？」

紙パックのレモンティーを私のカップに注ぎながら彼は言った。

「マーガリンだけでいいよ」

私はそう答えた。レモンティーをコップのきっかり八分目まで注ぐと、彼は冷蔵庫からすぐにマーガリンを取り出した。そして私のトーストに薄く均一に塗った。個人的にはもっとたくさん付けた方

が好きなのだが、身体に悪いからと言って彼はそれ以上決して追加してもさせてもくれない。

私はトーストを少しだけかじってからレモンティーを口に含んだ。朝食の時、私が紙パックのレモンティーを飲むことを習慣にしていることを知っている彼は、必ずそれに合わせて用意してくれるのだ。向かい合わせで私と同じように食事をしている彼。

いつもと変わらない。彼の家に泊まった翌朝の日常風景。

白い長袖のカッターシャツを着た彼と、半袖のブラウスを着た私。長袖と半袖。

なんだかちぐはぐでアンバランスだなと、私は意識する度に思う。今年の夏、彼はずっと長袖の服しか着ていなかった。

「ごちそうさまでした」

全ての料理を食べ尽くした私は、両手を合わせて言った。食後の挨拶であり、作ってくれた彼に対する感謝の気持ちを表した言葉。

彼にはまだコーンスープが残っており、飲んでいた。毎回僅差で私の方が早く食べ終わるのだ。

私は自分の分の食器類とグラスを一つにまとめて持ち、立ち上がった。

洗い物なら私だって彼と同等にできる。

私は台所へと歩く。けれど流し台まであと一歩というところで、左足が引っ張られた。左足に視線を落とすとそこには足枷があった。鎖がテーブルの脚からまっすぐ、ひもを張ったかのように伸びきっていた。

私は拘束されていたのだった。

「勝手に僕から離れるな!!!」

忘れかけていた事実を思い出した瞬間、鋭い怒鳴り声がとんできた。それと同時に背後から抱きすくめられた。

両脇の下から伸びてきた手が、私の胸を触り始める。

「やっ、ま……」

待って、と最後まで言えなかった。

私は持っていた食器類を落としてしまった。それらは床に当たり、音をたてて割れた。

早く片付けないと、と頭の片隅で思ったものの、彼が私の胸をまさぐり続けるため動けなかった。それどころか力が抜けそうだった。

「やあ、やめて」

私は声を上げ、抵抗する。何回も彼を受け入れてきたし、触られるのも嫌いじゃないけれど、心の準備ができていない。

「あ、やめ……」

制止の声をなんとか再び掛けようとして、私は言葉を飲み込んだ。後ろから感じる彼の息遣い。どこか確かめるかのように、執拗に私の胸を中心に愛撫を繰り返す手つき。

彼はこの行為によって私の存在を確認しているのだ。私が確かにここにいる、決して消えはしないのだということ。

私は抵抗するのをやめた。今拒否すれば、彼をより不安にさせてしまう。

彼の手が私のブラウスのボタンを外し始めた。そしてはだけさせられ露わになった私の首元に、彼は顔をうずめる。

「ひあ、んっ」

首筋に走る快楽を伴った鈍い痛み。同じような痛みが連続して私を襲う。

「あ、あっ、あん」

彼のモノだつて印を付けられている。

意味を成さない嬌声を漏らし、どこかぼんやりとする意識の中、

私はそう思った。

彼は普段決して私にキスマークを付けたりしない。何かの拍子で付いてしまった時には、私を傷つけたとひどく自分を責める。

そんな彼が私に自分の痕をたくさん刻んでいく。こうまでしないと私の存在を感じられない程、彼は追い詰められているのかもしれない。

私に触れる手と這わされていた舌が離れた。私はどうしたのか理

解できないまま、乱れた自分の息を整えようとする。

カシャン。

鍵が外れる音と共に、私に取り付けられていた足枷が床に落ちた。
「きやつ」

彼が後ろから私を再び抱き寄せた。そしてそのまま私を引きずるような形で移動し始めた。私は彼に引かれるまま、バランスを取るために足を後ろへ後ろへと出すしかない。

テーブルの横を通り過ぎた。彼は片手で私を捕まえたまま自室のドアを開けた。

「……ッ」

私はベッドに放り出された。身体に衝撃を受けたけれど弾力があって柔らかかったから別に痛くはなかった。

私が何か反応を示そうとするよりも早く、彼は馬乗りになってきた。
「んんっ」

手首を押さえつけられ、唇を塞がれた。貪るように荒々しく、一方的に口内を蹂躪される。掴まれベッドに張り付けられた手首が痛かった。彼にしては乱暴で、私は少しだけ悲しくなった。

彼が口を離れた。酸欠になりかけていた私は、過呼吸気味になりながら空気を取り込む。けれど息を整える猶予もなく、彼は私のブラウスに手を掛けた。

首筋、鎖骨、胸へと噛みつくようにキスされたり愛撫されたりしながら服を脱がされていく。時折視線が合う彼の瞳には不安定な揺れと、確かな欲情の色があった。

昨日の夜もしたのだから、私としてはせめて今晚までは身体を休めたかったが、この様子では拒否することはできない。拒絶すれば彼を傷つけることになってしまう。

彼が肌を重ねることでその存在を実感し安らぐことができるのなら、私は抱かれてもいい。それで彼が私を信用してくれるのならいくらでも受け入れる。

私が身にまとっているものを取り除きつつ、彼もカッターシャツを脱いでいった。私と触れ合う時以外決して長袖の服を脱ぐことのない彼の肌は日に焼けていなくて白い。普段は隠れて見えない、左腕の肘から手首にかけて巻いてある包帯も露わになった。

もう何か月も前からずっと巻き続けている包帯。「どうしたの？」と訊いても彼は「大したことない」の一点張りで、何も教えてくれなかった。

今もまた気になりかけたものの、彼に喘がされ理性を奪われていくうちにその思考は霧散した。

二日目(1)

だるい。全身が鉛のように重たい。そして何よりも眠たかった。ふわふわと浮上しかけた意識を、私は眠気からまた闇に沈めるために寝返りを打ち、掛け布団を握り締めた。ふかふかのベッド、頭に当たる枕の柔らかい感触、包み込むような布団の温かさに私はまたまどろみ始めた。

「ッ」

声が聞こえてきた。なんて言っているのかうまく知覚できなかつたけれど、私を呼んでいるみたいだ。私はよりギョツと目を瞑る。疲れているの。もう少しだけでいいから眠らせて。

「ッ、ッ、ッ」

けれど呼び掛けは止まなかった。さらに声と共に肩も揺さぶられる。私を起こそうとしているようだ。

身体を動かして反応を返すことがひどく億劫で、私の意識は夢と現実の間を浮遊し続ける。

「ッ、起きて」

だけど徐々に意識は現実に戻って来て、私へ掛けられた言葉が徐鮮明になっていく。

「起きて、起きてくれ」

懇願するような口調。必死だけど優しく私の肩を揺らし続ける手。私はハツと気づき、目を覚ます。すると視界に、今にも泣き出してしまいそうな顔をした彼が映った。

「……おはよう。どうしたの？ そんな顔して」

上から覗き込んでいた彼の頬に私は横になったまま手を伸ばし、触れる。温かさが私の指に伝わった。

彼にこんな表情をさせてしまうのだったら、眠気に負けずにもっと早く起きればよかった。私は心の中で後悔する。

「ごめん、ごめん、ごめん……」

彼は自分の頬に添えられた私の手を握り締め、うわ言のように謝罪を繰り返した。

どうしてそんなに謝るんだろう？

私はまだぼんやりとしてあまり働かない頭でそう考えた。彼に手を握られたまま私は目だけを動かす。

彼の部屋。カーテンから太陽の光が透過して明るいから、今は朝のようだ。さらに首を傾けると、ベッドサイドテーブルの上にはきちんと畳まれた私の服が下着を含めて置いてあった。私は伸ばした腕に視線を戻して、自分が裸であることに気づいた。

昨日はどうしたんだっけ？

私は異常に回らない頭で思考しながら身体を起こした。だるくて眠ったはずなのにまだ疲れを感じる。それに身体の、特に下腹部が重くてつらかったし、膣がじんじんと痛みを訴えていた。

「もう謝らないで。私は別に怒ってもあなたが悪いとも思っていないよ」

私はそう言いつつ、記憶がまだ混濁していたがとりあえず彼をなだめるためにベッドから降りようとする。シートと擦れ合う耳慣れない音を聞き、その時になって初めて私は左足首のひんやりとした感触に気づいた。

金属製の足枷。拘束具。

「あっ」

私の意識はようやくクリアになった。

昨日の朝、私がいなくなってしまうことを恐れた彼にこの足枷を取りつけられたのだ。そして朝食を食べて、その後不安定になった彼によって半ば無理矢理、ずっと抱かれていたのだ。

いつもなら一度で終わりなのに、昨日は何回も何回も一方的に犯され続けた。体位を変えたりしながら、ひたすら私の存在を確かめるように彼は身体を繋いできた。私は喘ぎ、ただただ彼を受け入れるしかなかった。

身体を重ねていない時も、愛撫されありとあらゆる場所にキスさ

れた。彼は片時も、まるで放した瞬間に消えてしまふかのように、不安げに瞳を揺らし私を求め続けた。

夜に一度だけ彼は平常に戻り、夕食を作ってくれ、一緒に食べた。その時も今みたいに謝っていた。「ごめん」と。

「ねえ、服だけ着させてくれる？」

私は掛け布団で身体を隠しながら言った。彼の気を逸らすためでもあったし、鬱血した痕がたくさん付けられた私を見て罪悪感を覚えて欲しくなかった。

「うん、いいよ。服を着る間だけならね」

昨日と同じように彼は足枷を外してくれた。『服を着る間だけ』という限られた時間だけだったけれど。

私は上半身から手早く服を身につけていった。そして最後にスカートに足を通し、着終えた。昨日と同じならばまた足枷を取り付けられて、彼に連れられ食卓に着くことになるのだろう。

「着終わったよ」

私はドアの前まで離れていてくれた彼にそう告げた。彼は昨日と同じく私に足枷を付け直した。やっぱり今日もこのまま拘束された状態で過ごさなければならぬようだ。

「朝食、もうできているから一緒に食べよう」

「あ、その前に一つだけお願いがあるの」

私は彼にそう言った。服を着ている途中から急激にある感覚が込み上げてきたのだ。

「何？」

ベッドに取り付けられた足枷を外していた彼は顔を上げた。その声は穏やかだったけれど震えていた。

「あのね、トイレに行かせてくれない？」

頼むのがちよつと恥ずかしかったけど、私ははっきりと言葉にした。こればかりは他に言い表しようがない。

「……いいよ、行こうか」

「ありがとう」

ベッドから外した足枷を持ち立ち上がった彼に私は礼を告げた。「礼を言われるようなことじゃない。君のは人間として当然の欲求だよ。僕は感謝されるようなことなんて、君に何一つできていやしないんだ」

彼は足枷を強く握り締めると歩き出した。私も転ばないようにその後が続いた。

部屋を出て、彼に連れられトイレに向かった。

トイレのドアを彼が開けてくれたので私は中に入った。彼はそれを確認すると、扉を閉めているようにしてくれた。『ように』と例えたのは実際には私の足枷から伸びる鎖によって、完全にドアが閉まっているとは言えないからだ。

ドアにきつちりと挟まれた鎖。普通に扉を閉めただけではすぐに開いてしまう。だからドアと鎖が食い込みあつたままなのは、彼が外でしつかりと扉が開かないように押さえられていることを示している。

人間としての尊厳を守ってくれる辺り、彼はやっぱり優しいななんて私は便座に座りながら考えた。

ただ、用を足している音を聞かれていると思うと羞恥心で顔が赤くなりそうだった。

トイレの中はカーペットが敷いてあり、便座とペーパー入れにはカバーが掛けてある。消臭剤も置かれていて、掃除も行き届いており清潔だ。

これは何もトイレに限ったことではなく、玄関、ダイニング、キッチン、お風呂、寝室。彼は家中を塵一つない状態にいつも保っている。女の私なんかよりずっと綺麗好きなのだ。

私は立ち上がった。取っ手を捻り流れていく水を眺めながら私はあることに気づく。

そういえばお風呂に入っていない。

クーラーの効いた部屋に閉じ込められていたとはいえ、ずっと一方的だったけれど彼と抱き合っていたのだ。汗をかいたりして

きつと不潔だ。

「ねえ、お風呂にも入りたくなっちゃった。丸一日洗っていないから私、汚いと思うの」

トイレを出た後、私は彼にそう言った。

「ごめん、すぐに沸かす。入るのは朝食の後になるけど」

「いいよ。ご飯、冷めちゃうもんね。ありがとう」

「礼なんか言わないでくれ。僕の配慮が足りなかったんだ。いや、もともと君は自由にしているのに、それを制限している僕がいけないんだ」

彼は自嘲気味に呟き、鎖を強く握り締め、私に背を向け歩き始めた。

ぐいぐい上に引かれ気味の足枷。

それは彼が鎖を自分の方へ必要以上に引き寄せている証拠だ。引かれる鎖は彼の不安の強さを表しているように思えた。

二日目(2)

朝食が並べられたテーブルに着いた。私が椅子に座ると彼は足枷をテーブルの足と繋いだ。

今日のメニューはトーストに野菜サラダ、そして昨日とは違い目玉焼きにコンソメスープだった。目玉焼きはベーコンを下地に焼かれていた。

「トーストには何を付ける？」

彼はそう訊きながらソースを私の近くに置き、紙パックのレモンティーをコップに入れた。

「今日はマーガリンにマーマレード付きがいいな」

私は彼にそう言い、醤油を手を取った。一般的に目玉焼きにはソースをかけるそうだけど、私は醤油派なのだ。

彼はマーガリンをトーストに薄く塗り、マーマレードを少し多めに付けてくれた。

私は目玉焼きを食べ始める。カリカリに焼かれたベーコン付きの白身は醤油と相まって絶妙でとてもおいしい。彼は料理の腕が高く、さらに私の好みを考慮した上でメニューを毎回考えてくれている。

彼の細かな気配りにはいつも感心する。

私はコンソメスープを飲んでいて彼を見つめた。スープを内側から外側にすくい、啜っている。まるで食事マナーのお手本のような正しい食べ方だ。

彼はまだ私を解放してくれないのかな？

今日までは休日だから拘束されたままでもあまり問題はなかったけれど明日からは平日、仕事だつてある。今日中に彼が安心して足枷を外してくれればいいけれど、無理だつたら色々支障が生じてきってしまう。あと、携帯をいじる機会がなかったため、友人から送られてきているかもしれないメールの返信もできていない。このまま音信不通にしてしまえば不審に思われる。それに……。

私は下腹部を押さえる。薬も飲んでいなかった。

「ねえ、私のバッグってどこにあるの？」

私は尋ねた。普段なら彼の寝室の端に置いておくし、今回もそうしたはずだった。けど今はバッグ自体が見当たらない。バッグの中には携帯や中身の入った医薬品ケース、その他身だしなみを整えたりする物とかが詰め込んである。

「どうして？」

彼は訊き返してきた。目差しからわずかに怯えが伝わってきた。

「友達からメールが来ているかもしれないからその返信をしたいの。無視し続けたら不審に思われちゃうでしょう。それと薬も飲みたいし」

私はゆっくりとあっけらかんと話した。

「駄目だ。教えられない」

「え？」

「君に返してあげることとはできない。必要ない」

「別に助けを求めたりなんてしないよ。ただ怪しまれないように普段通りの返事を送るだけだよ」

「必要ない」

彼は頑なに否定した。

「……じゃあ携帯は返してくれなくてもいいよ」

私は妥協案を出す。私が外部から助けを求めるかもしれないと疑っているのなら仕方ない。二日ぐらいなら連絡がつかなくたって忙しかったのだとごまかしは利くだろう。ならばそんな気はないと彼に示すのみだ。

「それでもできない。必要ない。バッグは返せない」

「薬、ピルを飲むだけでも駄目？」

私は薬の名称をストレートに口にし、訊く。

「駄目だ。返せない」

「……」

それでも首を振る彼に私は黙りこんでしまう。

下腹部を撫でる。昨日、彼は何も付けずに直に幾度も私の中に注ぎ込んだ。私も飲み忘れていたからもう遅いのかもれない。だけど彼らしくない物言いに胸が痛んだ。

僕はまだ君に対して責任が持てない。だからいつか、本当に君と一緒にになれる日まで、お互いのためにきちんと避妊はしたいんだある時、真面目くさった顔でそう切り出してきた彼と二人のための約束をした。する時、彼は絶対にゴムを付けるからその代わり私もピルを飲み続けるって。

本当はしないのが一番なのにね。僕の我儘に君を付き合わせている

あなたは我儘なんかじゃないわ。私もあなたとしたいって思っているもの。お互い様だよ

その時自嘲する彼の両頬を手で挟んで私は言い、背伸びしてキスした。私も彼のことを愛しているってことを伝えた。

もう彼にとってその約束はどうでもいいことになってしまったのかな？

私は沈黙したままコンソメスープを飲んだ。少し濃い目の味付けは私好みに合わせてある。

几帳面で自分を責めやすい優しい彼。そんな彼は簡単に約束を破ったりしようとはしない。

さつきも私がバッグの所在を尋ねたら瞳が揺らいでいた。きっと彼は不安と恐怖で私のことも信用できず、約束を守る余裕など持てないでいるのだ。

私はそんな状態に陥っている彼をなんとかしなければならぬ。絶対にいなくならないって、ずっと愛しているって、どうにか私の存在をしっかりと示して彼を安心させたい。

「ごちそうさまでした」

食べ終わると今日も私は両手を合わせて彼に感謝の言葉を述べた。「食器はどうすればいい？」

お皿やコップを一つに重ねて私は訊いた。昨日みたいに勝手に動いたら彼を怒らせてしまう。

「そのままにしておいてくれればいいよ。後で僕が片付けておくから。ごめん、あともう少しだけそのまま座っていて」

「うん」

私は頷いた。彼が食事を終えるまで待つていればいいのだ。

彼は私に気を遣ってか、急いでトーストを咀嚼し、朝食を全て平らげた。

「お風呂、きつともう沸いているはずだから入りなよ」

彼は空になった食器類を並べたままのテーブルの足首に取り付けた足枷を外した。そんなに慌てなくても別に構わないのなんて思いながら私は立ち上がった。そしてまた彼に鎖を引かれるまま、バスルームに向かった。

「ねえ、お風呂、一緒に入らない？」

バスルームに到着し、私は彼を誘った。彼の前に周り込み、寄り掛かるようにしながらカッターシャツを掴み、私はボタンを外そうとする。一つボタンを外すと同時に前のめりになっていた私の身体は当然のようにバランスを崩した。

けれど転びはしなかった。彼が私の両肩に手を添え支えてくれた。そのことがわかったから、私はそのまま彼のボタンをいじり続ける。「やめてくれ。一緒に入ることはできない」

彼は私を押し戻した。

「どうして？ 一緒に入った方が私を見張りやすいよ」

過去にも何回か一緒に入浴したことはあるし、大好きな彼となら私は何の抵抗もない。むしろ二人で洗い合っこしたり触れ合ったりお湯に浸かったりしたいと思うくらいだ。

「そうかもしれないけどできない。君一人で入ってくれ」

彼は自分の左手首を掴み後退り気味になりながら言った。

怯えている。私のことを怖がっている。

「わかったわ」

私は素直に引き下がる。こんな彼に無理強いはできない。

「そこに置いてあるバスタオルを使えばいいんだよね？」

バスルームの手前には洗濯機がある。その上にバスタオルがきれいに畳まれて置かれていた。

「そ、そうだね。他のもいつも通り好きに使っていいから」

「ありがとう。じゃあ一人で入るから足枷を外してくれない？ 服が脱げないから」

どもり震えた彼に、何事もないように私は足枷を指差し頼んだ。

「そうだったね。今、外す」

彼はしゃがみ込み、私の左足首にある枷の鍵穴にキーを入れた。

「……僕の前から消えないで、逃げないでよ」

鍵を差し込んだまま彼は私を見上げた。小さな子供が親に縋るような目つき。彼の純粋な恐怖が伝わってきた。

「私はあなたの前から消えないし、逃げたりもしないよ。心配だったら、私が服を脱ぎ終わった後に、もう一度足枷を付けていいから」

私は一言、一言、ゆっくりと彼に言い聞かせるようにし、微笑んだ。彼を少しでも安心させたかった。

「……」

彼は無言のまま鍵を回し、私の足枷を外した。

「ありがとう」

目を逸らした彼に礼を告げ、私は服を脱ぎ始めた。

ブラウス、スカートに下着。全部取り去り一糸纏わぬ姿になると、彼は黙ったまま、私の左足首に再び足枷を付けた。

「入ってくるね」

私は一言そう告げ、バスルームの扉を引き入った。

私は湯船の蓋を外した。中に溜まっていた蒸気がバスルーム内に広がった。

綺麗な浴室。髪の毛一本落ちていないし、もちろんカビなんて生えていない。シャンプーやボディーソープ等のボトルはきちんと並べられていて、使いやすいようにノズルの先端は全て、椅子に座つ

た時私の方へ向くようになっていた。

私は髪と身体を洗った。そして湯船に浸かる。

程良い湯加減。温かくて落ち着く。

私は子供のようにお湯を両手で掬ってみる。すると当然のごとくすぐに手から零れ落ち、音を立てた。一人だからその音はよく反響した。

左足首が時折、弱いながらもグイグイと引かれた。湯船をまたぎ、トイレの時と同じく扉にしっかりと挟まれた鎖の先から。引く力によつて濡れた鎖は常時震えていた。

今この瞬間も彼は私がいなくならないかを恐れ、不安定になっている。この足枷だけが彼の拠り所となつてることがわかった。

一緒に入れば良かったのに。そうすれば彼は少しは安らぐことができたかもしれない。けれど彼は嫌がった。無理だと断った。怯えた眼差しを私に向けた。

元々彼は誘つても遠慮がちであり乗り気になつてはくれなかつたけれど、以前はそれでも一緒に入ってくれた。身体を直視されるのを嫌がってはいたけど、まんざらでもなさそうだったのを覚えている。

最後に彼とお風呂に入ったのはいつだったっけ？

私は記憶の糸を手繰り寄せようとすが思い出せなかつた。かうじてわかるのは少なくとも今年ではないことくらい。いつからかやんわりと、だけどはつきりと拒否するようになったのだつた。

私は湯船から出た。まだお湯に浸かつてまどろみたい気分だつたけど、身体は十分温まつたし彼のためにも早く上がった方がいいと思つた。

私は入る時と同じく扉を引いた。

「出たよ」

バスルームの真ん前で待っていた彼にそう言った。姿だけじゃなくて声を聞かせることで、彼に私は確かにここにいるのだと実感して欲しかった。

「……」
彼はただ鎖をギュツと握ったまま私を見つめるだけだった。目を見開き、私のことを凝視していた。私はそんな彼を横目にバスタオルで髪をそして身体を拭き始めた。

「！」
髪の水気を雫となつてボタボタと落ちない程度に取り、身体全体を拭き終わり服を着ようとした時、背後から腕を回された。私は後ろを見上げようとす。

「いかないでくれ、僕の傍にいてくれ。消えないでくれ」

うわ言のように彼はそう口にし、私を抱き締めた。

「私はどこにもいかないよ。あなたの傍にいる。ちゃんとここにいますでしょう」

私は彼の腕を手でなぞつて伝えた。

抱き締める腕が緩んだ。私は彼の方へ向き直った。

不安に揺れ動く瞳。その中にあるのは純粹な恐怖。頬も強張っていて肩を震わせていた。

「きやつ」

次の瞬間、私は壁に押し付けられていた。逃れようとしても、彼の手で押さえつけられた手首はびくともしなかった。

「待つて。ひあ」

首筋に舌を這わされた。そしてそのまま鎖骨、胸へと降りてきた。「まつ、ば、場所。ば……やあ、あん」

膨らみの先端を甘噛みされて私は声を上げてしまった。

「やあ、変えよひゃあ、場所変え、んんっ」

喘ぎながらもなんとか、場所を変えよう、とすると唇を塞がれた。口内に彼の舌が侵入し、絡め取られ、伝えようとした言葉はかき消されてしまった。代わりに響くのは唾液の水音だけ。

「ハア、ハア」

やっと唇が離れ私は息を切らしながら彼を見た。

欲情している癖に、彼の顔には高揚感だとかそう言ったものは一

切なくて、とても苦し気だった。ひたすら恐れ、怯えをその目に湛えていて、行為によって私にぶつけるしか方法がないように感じられた。

そんな彼があまりにも切なく悲しくて、私は抱き締めたいと思った。彼を腕の中に抱きかかえて、大丈夫だよって全身を使って伝えてあげたかった。

「きゃあ」

身体を思い切り掴まれ、壁の方へ向かされた。彼に背を向ける形にさせられた。背後でベルトを外す音がした。

一方的に突かれるんだな。

彼を慈しんであげることにはできないんだと私は悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7892y/>

愛の証明

2011年12月31日16時46分発行